

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	Pattarat Phantprasit
論文題目	The Making of Honour and Masculinity of the Siamese Army from the 1900s to 1932 (1900年代から1932年におけるシャム陸軍の名誉と男性性の形成)		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、20世紀初頭から1932年までの時期の、シャム (タイ) 陸軍における名誉と男性性の構築とその変容を検討する。19世紀半ばよりシャムの仇敵であったビルマやベトナムが植民地化され平定された。こうした中で創設されたシャム陸軍は、いかに自らの存在を正当化するイデオロギーを構築したか、そしてそのイデオロギーはいかなる形で変化し、1932年の立憲革命に至ったのかという問題を、名誉と男性性という切り口から、多様な史料に基づき分析している。</p> <p>第1章では対象時期の軍と王権の関係に関する既存の研究を渉猟し、国王の果たした役割に注目する反面、軍の動きを看過しがちであり、また軍の動きを検討した研究も1932年の立憲革命など特定の政治的事件の分析が中心で、軍の存在を支えたイデオロギーとその変容に関する分析は、ジェンダーの視点も含めて不十分であったと指摘する。そして名誉と男性性に着目した本研究の意義が示される。</p> <p>第2章では、1890年代後半の改革前後におけるシャム陸軍の歴史を描き、伝統的な軍から近代的な軍への制度的変遷を概観する。19世紀末までシャムは常備軍を持たず、地方の反乱鎮圧等に動員された兵士は、国王への忠誠も規律も欠いていた。その後1893年のパークナム事件を契機に常備軍の必要性が認識され、1905年に徴兵制が導入される。並行して軍事予算の増加や組織の拡充が進められ、1920年代半ばの経済危機に至るまで増加・拡大が続いた。</p> <p>第3章では、1900年代から1920年代における軍の名誉の形成を、軍事式典と兵士に対する仏教教育の側面から分析する。徴兵制の導入後、軍に対する尊敬の念を醸成し王権への献身を強化すべく軍の名誉の概念が創出・強化されるプロセスを、国王に忠誠を誓う飲水儀礼、連隊旗への誓忠儀礼、国王への元帥捧奉呈式典を取り上げて分析する。また兵士に対する仏教教育の内容を、教科書や軍の内部報告書から考察し、特に国王に対する報恩感謝が強調され、国王を頂点とするチャート(“nation”)への忠誠が教えこまれていった。</p> <p>第4章では、徴兵された平民男性を名誉ある兵士に仕立てるための様々な方策が考察される。軍律が整備され懲罰が導入され、軍事訓練では細かな立ち居振る舞いが教え込まれた。身体的強壯は重視されなかった一方、制服の着用、清潔維持、時間厳守など礼儀作法が細かく規定され、酩酊や借金、娼婦との関係は、軍と国王の名誉を汚す行為とみなされ禁じられた。同時に大規模なスポーツイベントが開催され、イベント</p>			

を通じて、名誉ある兵士の姿は広く一般に公開された。

第5章では、「タイ歴史学の父」と称揚されるダムロン親王や軍の高官となった王族が1910年代から20年代にかけて執筆した近代的歴史叙述としての軍の歴史を分析する。いずれもアユタヤー時代に遡り、軍がシャムの独立に果たした役割と国王のリーダーシップを強調する筋立てになっており、歴史叙述は軍の存在の正当化に使われた。また軍のスポーツイベントの際、18世紀末のシャムとビルマとの戦争を模したショーが開催されるなど、歴史的重要性は広く人々にも伝えられた。

第6章では、六世王ワチラーウット（在位 1910-1925）による理想の男性像の構築とその変遷を論じる。ワチラーウットは、理想のエリート男性像として「ルーク・プーチャーイ」を示した。その後、第一次世界大戦を契機に、国のために犠牲を厭わない勇敢な戦士たる男子像「ナック・ロップ」を提起した。連合国の一員としての参戦は、シャムの兵士が世界の舞台で諸外国と対等の地位を獲得する機会として国内でも喧伝されたが、終戦後は改めて品行方正な兵士像が強調されるようになった。

第7章は、『セーナースクサー・レ・ペーウィッタヤーサート』（『軍事学と科学普及』）を中心に、軍が発行した雑誌に掲載された記事を題材に、そこに示される男性像を検討する。同誌は民間の作家グループとの交流の場ともなり、1920年代には、台頭した都市中間層の価値観を色濃く反映した小説が掲載され、経済的困窮が題材に取り入れられ男女関係における誠実さも含めた多様な男性像が示された。一方、戦士としての軍人の政治への関与も議論されるようになった。

第8章は、1920年半ば以降、大恐慌へと続く時期における、軍の経済危機への対応と変容を検討する。軍は大幅な予算削減、人員削減、組織再編を迫られた。新聞紙上でも軍に批判的な記事が掲載され、兵士の経済的困窮も相まって、軍の人気は低下した。こうした状況に対して、軍と王権は従来国王とチャートへの忠誠、よき市民としてのモラルに加え、儉約など経済的側面も含む名誉の概念の再定義を試みたが、十分に対応することができなかった。

終章は全体の議論を要約する。1900年代以降、シャム陸軍は、外敵と戦う機会がない中、自らの存在を正当化するために軍の外部にその根拠を求めざるを得ず、その正当化のイデオロギーは時代の変化に応じて変化した。国王、仏教、チャートと結びついた名誉や男性性は、1920年代以降次第に都市中間層の価値を取り込んで変容し、さらに経済的危機の中、軍に対する批判の高まりと王権の正当性の低下とともに、軍は新たな名誉と男性性を模索することとなった。最後にこうした軍の名誉と男性性の再定義は、1932年の立憲革命後も続いた可能性を示唆して全体をしめくくる。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、1900年代から1932年に至る時期におけるシャム陸軍のイデオロギーの生成と変遷を、名誉と男性性を切り口に検討する。より具体的には、国王、仏教、チャート(“nation”)と強く結びついた軍の名誉と男性性が、なぜ、いかに構築されたのか、そしてそれがいかに変化していったのかという課題を考察する。タイ国立公文書館やチュラチョームクラオ陸軍士官学校図書館に所蔵される陸軍関係の公文書史料をはじめとして、裁判記録、兵士の嘆願書、王の書簡や演説、軍の教育に用いられた教科書、法律や布告、『ユッタコート』(『戦界』)や『セーナースクサー・レ・パーウィッターサート』(『軍事学と科学普及』)など軍の雑誌、軍の歴史を描く著作、その他新聞記事など、関連資料を幅広く渉猟し、多様な側面から分析している。

B. アンダーソンの議論を踏まえて、シャムの陸軍は対外戦争に従事しなかった結果、その存在を正当化する根拠を王権に依存するようになったという基本的な枠組みを示したうえで、王権の正当性が揺らいでいった1920年代末から1930年代初頭に至るまで、名誉と男性性という一貫した切り口の下で、軍を支えるイデオロギーを詳細に跡付けている。その結果、ワチラーウット王により構築された軍の名誉と男性性の概念が、王権との関係のみならず経済や社会の変化の中で揺らぎ、次第に変容を余儀なくされたことを豊富な史料をもって明らかにした。とりわけ以下の点について新たな視点と知見を提供している。

第1に、もっぱら王権側に焦点をあてたこれまでの研究に対して、本研究では軍内部の視点を重視し、軍の側の多様な史料を丁寧に読み解きながら、国王、仏教、チャートへの忠誠を軸とする名誉と男性性の概念の形成と普及過程を明らかにしている。徴兵制が導入された1905年以降、軍事教育、法律・規則、身体統制と懲罰、軍事関連儀式、歴史的記述などを通じて、軍がいかに男性市民を忠実な兵士に変え、その姿を一般社会に示そうとしたかが詳細に検討され、王権への忠誠は強調された反面、身体的壮健さは強調されなかった等の特徴が丁寧に考察されている。

第2に、第一次世界大戦への参戦、都市中間層の台頭、経済危機など外的要因に広く目配りし、第一次世界大戦を契機に名誉と男性性をめぐるイデオロギーが変容し、多様化していったことを、社会変化の文脈において詳細に跡付けている。ワチラーウットは、国王、仏教、チャートへの忠誠を軸とする軍の名誉と、高貴な生まれの男性にふさわしい男らしさとして、酒、賭博、女遊びを避けることなどを軸とした「ルーク・プーチャーイ」を構築していった。第一次世界大戦が勃発すると、今度は国のために犠牲を厭わない戦士たる男子像「ナック・ロップ」が提唱されるようになり、1917年連合国の一員として参戦し戦勝国に名を連ねると、さまざまなメディアを通じてその姿が喧伝された。だが終戦後は一般社会における礼儀作法も取り込んだ品行方正な兵士像へと変容

した。その後、都市化、中産階級の台頭、そして経済危機をうけて、兵士たち自身が示す名誉や男性性も多様化し、一部には国王への忠誠や仏教的価値に言及しない戦士としての軍人や、軍の政治的関与も提起されるようになった。その一方で国王と軍の将校は、国王、仏教、チャートへの忠誠を強調し続けた。

この点と関連して、第3に、軍の雑誌、なかでも『セーナー・スクサー・レ・ペーウィッタヤーサート』誌が、1920年代以降、次第に娯楽性を高め、軍人のみならず在野の作家も執筆者として名を連ね、一般市民を読者に取り込むなど、台頭する中間層と兵士との知的交流の場となっていたこと、そしてその中で軍の男性性が台頭する中間層の価値観から影響を受けていたことを明らかにした点も、オリジナルな貢献として評価できる。1920年代後半から30年代初めにかけて同誌に掲載された軍人や士官候補生の手による短編小説を分析することにより、名誉や男性性をめぐり、経済的地位や男女関係における誠実さなど多様な価値が反映されるようになった様子を提示している。文筆家として著名なクラブ・サーイプラディットも一時編集に関わっていた同誌掲載小説の分析は、黎明期タイ近代文学研究に対する貢献にもなっている。

以上、本論文は、名誉と男性性という独自の切り口からシャムにおける軍のイデオロギーの形成と変化を多様な史料を駆使して綿密に跡づけ、多くの新たな知見を提供する労作であり、タイ史研究への学術的貢献を高く評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2021年11月4日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。